

Title	ベラ・サネッティとレオン
Author(s)	森本, 久夫
Citation	Estudios Hispánicos. 1993, 17, p. 97-106
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/97923">https://hdl.handle.net/11094/97923</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ベラ・サネッティとレオン

森本久夫

ホセ・ベラ・サネッティの壁画に初めて接したのは1977年夏のことである。そのときの印象は拙稿「レオンの夏」に誌した。

その後いく度かレオン市にあるヘスス・ディビノ・オブレロの教会の主祭壇の背後にあるその壁画に接してきたが、最初に感じた意外性は少しずつ減っていったが、魅力は相変わらず強烈である。はじめての時に感じた意外性は、考えてみれば私の中にある先入観からくるものかも知れない。例えば教会の雰囲気と労働者を表わすハンマーにすこし違和感を感じたのが正直なところである。教会のヘスス・ディビノ・オブレロという名称のオブレロから労働者を表現しているのであろうと勝手に自分を納得させたものである。しかし度重ねてこの壁画の前に立ってみると、働く人の姿が表現されていることがよくこの教会に調和しているように思えてきた。そしていつの間にか何の違和感も感じないでこの作品に見入っている自分を見出すのであった。

彼の描く図像は太い描線で表わされ、人物の表情がはっきりしていて劇的である。非常に強固で重厚という印象を私は受ける。

数度にわたるレオン滞在中にこの都市に彼の作品の多いことに気づいた。そしてそれは何故なのかが疑問になってきた。

1987年夏にはヘスス・ディビノ・オブレロ教会に付設されている聖職者用宿舎で1ヵ月神父たちと暮らしたが、その宿舎の玄関口を入ったところの正面にベラ・サネッティが描いた聖人たちの像があった。親しくなった司祭たちは本堂の壁画と同じ画家の作品で聖人たちを描いたものだと教えてくれただけで、それ以上はだれも語ってくれなかった。

商業学校（レオン大学所属）の講堂でも彼の作品を見かけたし、市役所の階段の壁面でも彼の作品を見た。

ルイス・サストレやエンリケ・アスコアガの著作<sup>①</sup>からベラ・サネッティの生い立ちを辿ってみると、ホセ・ベラ・サネッティは1913年3月27日ブルゴス県のミラグロスで生まれた。父はニコストラート・ベラ・エステバンといって獣医学を学んだ人でレオン市にあったオビエド大学の生物組織学の教師であった。農作業をする人であった。母マリア・サネッティは1911年5月10日アラランダで父ニコストラートと結婚した。彼女の祖父はベネチア人で画家であった。

ベラ・サネッティはレオンで中学に行き、成人した。土・日曜に絵を描くことに専念した。彼がルイス・サストレに話したところによると、父は彼にマドリッドに出てイスパニアのすぐれた画家たちが生活していくためにどれ程努力しているか見てくるようにと言ったという。このマドリッド行きからレオンに戻って、彼は画家になる決心をしたという。

彼は父の知人であったマヌエル・バルトロメ・コシオに紹介されてホセ・ラモン・サラゴサの弟子になった。彼が壁画に関心をもっていくようになったのにはバルトロメ・コシオが影響しているようである。ベラ・サネッティは彼を通してエル・グレコを学んだと語っている。

1931年レオンの県議会場で作品を発表し、カサ・デル・プエブロで最初の壁画（今は崩壊）を描いた。1933年レオン県議会は彼にイタリア留学の奨学金を与えた。

1977年の夏、はじめてヘスス・ディピノ・オブレロ教会の壁画（1959年作）について私に説明してくれた当時のこの教会の主任司祭が、若いころここで大変世話になった感謝をこめて彼はこの絵を描いてくれたという意味のことを言ったが、そのとき私はそのことが具体的にどういうことを指していたのか訊ねはしなかったし、気にもとめていなかったが、彼の経歴を調べていて、ふっとあの神父がこのイタリア留学のための奨学金のことを指していたのではないかと思われてきた。私には最初に彼の画家としての才能を見出したのはレオンの人たちであったと思われる。

この頃のベラ・サネッティはスルパランやゴヤに師事したようである<sup>②</sup>。

彼がフィレンツェに留学中、イスパニアでは内戦が起こり、彼の父がフランコ側の人たちに殺された。彼は帰国すると共和国軍に入り、最初は機

関銃隊の文化部で活動したが、マドリッド包圍戦からは兵士として戦った。内戦が終結すると、彼はドミニカ共和国のサント・ドミンゴに亡命した。

「他の多くの人々と同様、とにかく食べて行くためにサント・ドミンゴに辿り着いた。数日は刷毛で絵を描いた。一時は壁画を描いて左官なみの給料にありついた」と当時のことを述懐している。<sup>③</sup>

また、メキシコのリベラ、オロスコ、シケイロスら壁画家たちを前にして自分の存在を主張できるようにならなければ壁画家として自認できないと考えたようである。メキシコで自作を制作するまでは壁画家となるまいと自分に誓ったという。後に彼はメキシコ市でいくつかの壁画を描いている。タマヨとは親交があった。

サント・ドミンゴで10余年多くの壁画制作をつづけた。そして1952年フランスのレジェ、ノルウェイのペーター・クログとともに選ばれてベラ・サネッティはニューヨークの国連会場の壁画制作に当たることになった。このことはベラ・サネッティが世界的に壁画家として認められたことになる。

1958年彼はメキシコで多くの制作を行った。メキシコ市のドン・ホアン・マヌエルの邸宅はその一例である。

1960年彼は帰国した。その時点での政治体制と相容れない亡命者としての帰国であった。国内亡命者でありながら、この時彼はレオンのヘスス・デイビノ・オブレロ教会の壁画を制作したのである。アスコアガは1960年に彼は帰国したと述べている<sup>④</sup>が、サストレはこの作品は1959年としている<sup>⑤</sup>。ベラ・サネッティは帰国の前年に制作をしたことになる。

ベラ・サネッティの壁画制作はつねに現場にいての制作という。それなら1959年という制作年号がまちがっているのかも知れない。今のところ私には判断を下す資料が他にない。

それはとにかく、当時亡命先から帰国した画家たちは彼に限らず、みなよく働いたが、生活は苦しかったという。ベラ・サネッティはヘスス・デイビノ・オブレロ教会だけでなく、バスコ・ウリエラ学校の喫茶室など学校の壁画5つ、商業学校の講堂、ホテル・コンデ・ルナ、新市庁舎の階段の壁などをレオン市で制作しており、ブルゴスではアルコ・デ・サンタ・マリアの塔の「フェルナン・ゴンサレス」、ブルゴス県議会場の「エル・シッド」の大作などを制作しつづけた。

まずモハカルに一軒家を買った。自分のルーツを探し、生まれ故郷のミラグロスに帰った。そこで幾夏かを独りで暮らした。ついにブルゴスの冬を越すための暖房装置を設けてついの住み家に決めたという。

ミラグロスには彼の一族の人々が住んでいる。彼はそこに落ち着き、絵筆をふるうことに専念した。

帰国後の彼の制作の旺盛さはバリアドリッド大に提出されたエウラリア・デ・ミランダの論文によると、イーゼルの上で描かれた作品が1,070作あるということからもうかがえる。<sup>⑥</sup> これは1981年のアスコアガの著作が出版されるまでの話である。

彼の作品を理解するために彼のサストレへの返答を挙げる。

「イスパニアのマエストロとしては疑いもなく私はスルバランとゴヤを認める。イタリアのマエストロとしてはマンテーニャとピエロ・デッラ・フランチェスカを認める。アメリカ大陸にはオロスコというマエストロを私はもっている。ピカソだって。ピカソについては名を挙げるまでもないだろう。私たちはみんな彼に負うところは大きい。」<sup>⑦</sup>

彼は美術学校には行かなかったし、特定の流派やグループにも属さなかった。

マヌエル・バルトロメ・コシオによってエル・グレコの作品を知るようになり壁画に関心をもつようになった。ラテン・アメリカに亡命してメキシコの壁画運動の巨匠たちの作品に接し、壁画家として大きく成長したのであろう。サストレとのインタビューでベラ・サネッティの口から一度ならずオロスコの名が出てきたことは彼のオロスコへの関心の強さを示しているように思える。1987年3月メキシコのグアダラハラ市のパラシオ・デ・ベリヤス・アルテスのオロスコの壁画を前にして壁画家チャベス・ベীগ氏が私に「メキシコでは美術の目的は飾ることではなく、芸術家の思想を表現することなのだ」と言ったのを思い出す。その姿勢はベラ・サネッティにも共通するのではないか。

ベラ・サネッティは言う。

「私の壁画において、私のあらゆる絵画において、私は人間に向かうのであって群衆には向かわない。なぜなら、それは夢想だから。どこの家の入口にでも置かれる『戦士の帰還』において、一日の戦さに疲れてその人

物が家に帰ってくる姿を描こうとした。—— 中 略 —— エルナン・コルテスについて壁画を頼まれたとき私は断わった。私は彼とともに伝道者、十字架、車輪、冒険家たち、ヘルメット、馬、馬の脚などを見る。丁度インディオたちが彼を見たときのように。たった1人の人物の中にそれらすべてがあり、信仰と進歩の象徴でありながら渇きと飢えを具現している。<sup>⑧</sup>彼はまたこうも言う。

「私の絵画は人々のものであり、人々のためのものである。」<sup>⑨</sup>

この発言は同じ時代のイスパニア出身の壁画家ホセ(ジュセップ)・レナウと共通する考えである。

「私は絵の題名をなんら重視しない。いつも描き終えてからつける。同じことが弟子についても言える。私はひとりも弟子はもたないし、持とうとも思わない。」<sup>⑩</sup>

イスパニアに帰国し、生まれ故郷に落ち着いた画家は回顧して言う。

「今、私はメキシコとサント・ドミンゴを経てニューヨークからイタリアへと四半世紀近い長期間をイスパニアに帰れる日を待ちながら孤独に生きたことに気づく。」<sup>⑪</sup>

この「イスパニアに帰れる日を待ちながら」という表現の中に、私は「生まれ故郷」あるいは「自分の育った土地」への望郷の念がこめられている思いがする。彼に内戦がなければ、たとえ内戦があっても父を殺されるという不幸がなければ、四半世紀近い亡命生活はなかったのではないか。それは一人の人間の生涯にとって長い期間である。大きな空白を彼の人生にもたらしかねなかった。しかし彼はその四半世紀を空白にはしなかった。食べていくためとはいえ、彼は働いた。彼の働くことは壁画を描くことであった。サント・ドミンゴで住んでいる間、多くの壁画を描いた。それが彼の業績となり、彼を成長させた。ついに1951年ニューヨークの国連会場の廊下に筆をふるうにいたった。1959年にはジュネーブのILOにも壁画を描くようになった。

壁画家として目標にしていたメキシコでは1958年ドン・ホアン・マヌエルの邸宅だけでなく、出版社エレロ、ホテル・レフォルマ、アカプルコのフンボルト・ビル、モートル・タンパ、ホテル・テカリなどに壁画を描いている。

「帰国後のイスパニアでの最初の仕事はE.ウルタド博士の依頼によるホ

テル・コンデ・ルナであった。そのあと、レオンの司教アルマルチャ博士の依頼でヘスス・ディビノ・オブレロの壁画を制作した。司教はたしかに庭のこれらのポプラの木をプレゼントしてくれた。」<sup>⑩</sup>

私の想像にすぎないが、どちらかという親フランコの空気の強いレオンの地で、フランコ側に敵対して戦い、亡命していた画家にこの大作を司教が依頼したことは、イデオロギーを越えたものがあったのではないか。私には詳しいことは今の段階では知る由もないので、すべては推測にすぎないが、レオンの地の教師であった人の息子で、その画才を一番最初に認めたレオンの人々にとってはベラ・サネッティはレオンの人間であり、レオンで育ち、レオンで画家になった人だから、彼に仕事をさせたかったのではないか。そう考えるなら、ヘスス・ディビノ・オブレロ教会の主任司祭の説明も私には具体性をもって納得できるのである。

この壁画の中心にはキリストが立っている。石を打つハンマーを握る手もあれば、原子エネルギーを示す図もある。私はその手にキリストを感じた。キリストは人間のために働いた。人間の救いのために働いた。私たちはそれを見て感動する。そして私も今私の住んでいるこの世界の中で働く者でなければならないような気がする。私は私なりに勝手にこの作品を前にして考える。そこに私たちの救いのために一生を捧げてくれたキリストという人がいる。自分のすべてを人のために投げ出した人間が描かれている。ベラ・サネッティはそんな人間としてのキリストを描こうとしたのではないか。そんな気がする。

人はブルゴス県で生まれたからブルゴス人と呼ぶのであろうか。アスコアガはベラ・サネッティのことを「ブルゴス人の画家」と呼んでいる。あるいはレオンで育ち、そこで成人したからレオン人と呼ぶのであろうか。サストレは彼を「レオン人の画家」と呼ぶ。私は自分自身にそれを置き換えてみて考え込む。私は京都で生まれ、少年時代の半分をそこで過ごした。しかし私の両親は和歌山県出身であり、私は少年時代の後半を紀伊半島の山間の村で過ごした。そんな私は京都への執着と同じく強い和歌山県への執着を感じる。

サネッティは自分のルーツを求めた。そして生誕の地であるミラグロスに安住の地を見つけた。同じ血を引く人々が住む地で、父がそうであったように、ひたすら精を出す。父が農地に興味を持ったように、彼は人を観

察し、画布にそれを描く。毎日毎日描く。

私はそんなベラ・サネッティの姿にイデオロギーを越えて、人間そのものに関心を持ち、それを描きつづけることにやりがいを感じている人を見出す。

故郷帰還後のベラ・サネッティの最大規模の作品はブルゴス県議会議場の「エル・シッド」であろう。200平方メートルの作品である。エル・シッドはブルゴス出身の英雄である。ブルゴスは最適の壁画家を得たことになった訳であり、画家にとってはまたとない制作のチャンスであったにちがいない。まだ実物に接する機会に恵まれない私にはアスコアガの著作に載っている写真から想像するしかないが、図形によるエル・シッドの叙事詩が展開されている。

ベラ・サネッティは言う。

「壁画はいつもそこにある物であって、(額に入った) 絵画のように家中の居間にあるものではない。壁画は闘わねばならないし、見る人全員に敬意を感じさせるはずである。だから、例えば、市の役人がブルゴスの県議会議場へ行ったときにどう感じるか想像してみたい。きっと自分たちは立派だという気持ちにさせられるはずである。」<sup>③</sup>

壁画は彼も言う通り、私的な場所にあるよりも、もっと公的な場に、置かれているのではなくて、そこに存在するものとして描かれたものである。だからそこを訪れる人は、あるいはそこを通りすぎる人はふとそこに見かけた壁画によって救われる気持ちにもなれば、暗い気持ちにもなろう。ベラ・サネッティの作品は骨太な描線で描かれているから、私たちの眼の中に鮮明な映像を残す。色の数の少なさも鮮明さを極立たせる助けをしているのではないか。この特徴を記念碑的・彫刻的と呼ぶ人もある。<sup>④</sup>

現時点の私は、ベラ・サネッティはレオンで育った。だからレオンに数多くの壁画を残してきたのであろうし、反フランコ側に立って戦って敗れ、亡命生活を送ったけれど、レオンで戦後フランコ体制下にありながらヘスス・ディビノ・オブレロ教会の壁画のような作品を残し得たのは、彼が特定の政治イデオロギーの芸術家ではなく、人間そのものに関心をもつ芸術家であったからであろうと考えている。しかし、それ以上に、レオンの土地はまだ20歳にもならない頃から彼の画才を見出しただけに、「わが故郷の芸術家」という意識があったのかも知れないと思う。あるいは、アストル



ガにガウディに司教館を建てさせた司教のように、アルマルチャ博士の個人的共感からだったのだろうか。私にはこれから確定すべき課題である。

彼の主要壁画制作を年代順にみると次のようなものがある。

- 「悲惨な人々」, 居酒屋エル・ボデゴン, レオン (崩壊)
- カサ・デル・プエブロ, レオン (崩壊)
- 「海」, 「陸」, 学校の喫茶室, レオン (崩壊)
- 「最後の晩餐」, サグラド・コラソン教会, サントウルセ, プエルト・リコ (崩壊)
- 「ティルソ・モリーナの部屋」, メルセー教会, サント・ドミンゴ
- サント・ドミンゴ市庁舎
- サント・ドミンゴの裁判所
- サント・ドミンゴの国立銀行
- 建築家ホセ・A・カロの住居, サント・ドミンゴ
- サント・ドミンゴ大学医学部
- 国立図書館, サント・ドミンゴ
- サン・クリストバル教会の壁とドーム, サント・ドミンゴ
- サント・ドミンゴの農業インスティトゥート
- 「メソン・デ・ラス・インディアス」, ボゴタ, コロンビア
- サント・ドミンゴのパラシオ・デ・ベリヤス・アルテス
- 国際連合, ニューヨーク
- サルバドール・ゴージェ病院, サント・ドミンゴ
- サント・ドミンゴ大学理学部
- ドン・ホアン・マヌエル邸, メキシコ
- 出版社エレロ, メキシコ
- ホテル・レフォルマ, メキシコ
- アカプルコのフンボルト・ビル, メキシコ
- モーター・タンパ, アカプルコ, メキシコ
- 建築家フタネル宅, メキシコ
- ホテル・テカリ, メキシコ
- 国際労働機関, ジュネーブ
- アルタグラシア大聖堂, サント・ドミンゴ

ホテル・コンデ・ルナ, レオン  
 ヘスス・デイピノ・オブレコ教会, レオン  
 バスコ・ウリエラ社文化総合施設内の講堂と礼拝堂, ラ・ロブラ, レオン  
 商業学校, レオン  
 「エル・シッド」, 県議会場, ブルゴス  
 ミュージアム・フィエロ, レオン  
 「戦士の帰還」, ドクター・フレミング館No.14, マドリッド  
 「使徒たち」, ホセ・ドゥラン氏私宅, レオン  
 中央銀行, マドリッド  
 コレヒオ・デ・サン・ホセ礼拝堂, レオン  
 新市庁舎, レオン  
 「フェルナン・ゴンサレス」, アルコ・デ・サンタ・マリアの塔, ブルゴス  
 「建設者たち」, ビガール館, アランダ・デ・ドゥエロ, ブルゴス  
 コレヒオ・レオネメスの玄関, レオン  
 コレヒオ・メノール・ヘスス・デイピノ・オブレコ, レオン  
 出版社プラサ・イ・ハネス支店, バリャドリッド  
 ロス・トミリャーレス団地, ブルゴス  
 「最後の晚餐」, エドゥアルド・デル・バーリエ・イ・メネンデス氏宅, レオン  
 「ぶどう摘み」, クリスタバル・アリアーニョ氏私宅, マドリッド  
 「ドゥエロ川のぶどう摘み」, フリオ・カノ氏宅, ブルゴス  
 「取り入れ」, パレンシア地方金庫  
 「地方の生活」, ブルゴス地方金庫  
 「人間的なもの」, 「科学技術者」, ドミニカ共和国勸業銀行  
 バルセロナの出版社プラサ・イ・ハネスのホール  
 「ドン・キホーテの死」

## 註

- ① Luis Sastre: *Vela Zanetti*, Servicio de Publicaciones del Ministerio de Educación y Ciencia, 1974.  
 Enrique Azcoaga: *Las pinturas murales de Vela Zanetti*, Diputación Provincial de Burgos, 1981.
- ② Enrrique Azcoaga: op. cit., pág. 8

- ③ Luis Sastre : op. cit., pág. 22
- ④ Enrique Azcoaga : op. cit., pág.31
- ⑤ Luis Sastre : op. cit., pág. 101
- ⑥ Enrique Azcoaga : op. cit., pág.34
- ⑦ Luis Sastre : op. cit., pág. 31
- ⑧ Ibidem. pág.37
- ⑨     "     pág. 38
- ⑩     "     pág. 43
- ⑪     "     pág. 44
- ⑫     "     pág. 35
- ⑬     "     págs. 39-40
- ⑭     "     pág. 71